

MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

36

2011.3.31

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY NEWS

富士吉田あれこれ



■御師住宅とフジザクラ(博物館エリア)

富士吉田市のプロフィール

富士吉田市は、平成22年度に市制施行60周年を迎えたことから、これを記念して本年度はさまざまな記念事業がおこなわれました。今回は、これを機会に富士吉田市の土地柄や特色を象徴的に示すものとして制定された市のプロフィールを紹介します。

富士吉田市は昭和26年(1951)に市制施行されました。富士上吉田町・下吉田町・明見町の3町が合併して市となる段階で、新しい市の名称をどうするのか当時議論がなされました。「吉田」という地名は古くは『勝山記』の文明12年(1480)の条に「富士山吉田鳥井立」と記されており、また、同記の天文14年(1545)の雪代の記録には「下吉田」の地名もみられます。中世段階には既に「吉田」という地

名が使われていたことから、市制施行時の三町合同議会協議会では、『昔からの呼び名であった吉田に富士を冠し富士吉田として…』最も適切な名称として富士吉田市としたとあります。

全国各地の自治体では、各市町村の象徴として「市民憲章」や「木・鳥・花」などについてそれぞれ制定しているところが多いようです。中には「動物」や「魚」を加えているところもあります。

富士吉田市が制定しているプロフィールは3項目となっています。「市の木」としては、昭和45年(1970)に白樺が制定されています。白樺は日本の高原を代表する木の一つです。「市の鳥」は、平成2年(1990)にアカゲラ(赤啄木鳥)が制定されています。そして、「市の花」は昭

和45年(1970)にフジザクラが制定されています。

フジザクラはバラ科の落葉小高木で正名はマメザクラ。花は小さく、下むき加減にはじょうように咲くように見えることから別名「乙女桜」ともいわれます。4月中旬から5月にかけて、富士の裾野を彩ります。この博物館の園内でもその時期にはたくさんのフジザクラが開花します。また、吉田口登山道の中ノ茶屋周辺も国指定天然記念物となっているフジザクラの群落があり、どちらにも多くの方々が見学にみえます。近年ではこの時期に「ふじざくら祭り」が開催され、さまざまなイベントが催されるようになりました。「観光振興サービス」のホームページなどでは、毎日開花情報をアップしていますので、参考

にして見学に来られてはいかがですか。フジザクラは、昭和29年に山梨県の花としても制定されています。

こういった市政の概要は、市民の皆さんにどれだけ浸透しているのでしょうか。実際には知らない方も多いのではないでしょうか。自分たちの街の特色を再認識するうえで、また他地域の方々にも是非知っていただきたいと思います。今年から、正午のチャイムで市民愛唱歌を流すようになったのも、その試みの一つといえます。このような街のプロフィールは、各自治体が発行している市政要覧やホームページ上で知ることができます。自分の住んでいる街のプロフィール、調べてみてはいかがでしょうか。

(布施光敏)

みろくどう 身禄堂の由来と変遷(中)

ごしんぜん やまもとこう
- 田辺家の御神前から山元講の身禄堂へ -

身禄堂の歴史

前号までに身禄堂の前史をみてきましたが、本号では、身禄堂建立以後の歴史をみていきます。現在の身禄堂は、後述するように大正～昭和初めの建立ですが、その前身も含めると大きく4度の変遷を経ています(図1)。まず、身禄堂の前身ですが、残念ながら現存しません。ただ、あくまで推定になりますが、可能性のある建物を明治25年版行の『富士山北口本宮富士嶽神社境内全図』にみることができます(1期・図3)。

田辺家は、現在と異なり、学校道沿いでなく、表通りに面して建物が描かれ、6代目田辺歳郎の名があります。入口には、表門があり、その下手には蔵と思われる建物があります。なお、この蔵と同一かは不明ですが、身禄堂の厨子内に安置された棟札(※1)に、5代目田辺道豊が、天保4年(1833)に蔵を建立したとあり、明治25年以前から蔵はあったことが分かっています。表門の奥には、横家で平入りの主屋が描かれ、更にその奥には竪家で妻入りの建物があります(※2)。なお、当時の田辺家の写真(写真1)も残ってお

り、それをみると、表門、蔵、主屋の位置関係は、絵図とほぼ一致し、正確に描かれていることが分かります。

この内で、身禄堂の前身と推定されるのは、奥にある竪家・妻入りの建物です。ただ、当時の身禄堂は、現在とその性格が異なっていたと考えられるため、まずそこを紐解いていきます。詳しくは後述しますが、身禄堂の前身や戦前の身禄堂は、食行身禄を祀る山元講のお堂としてだけでなく、各御師の家にあった御神前(神仏を祀る一室)と同じく、富士山の神仏も併せて祀る御師田辺家の御神前でもあったと考えられます。そのため、現在の身禄堂内にも、食行身禄像以外に、富士山の祭神の木花開耶姫命像が現存し、かつては身禄の師にあたる長谷川角行像もあったと伝わります。

このように身禄堂の前身が、御師田辺家の御神前でもあったとすれば、他の御師の御神前と類似点があるはずですが、まず、上吉田に現存する御神前は、主屋若しくは離座敷内にあるものと主屋と別棟になっているものと、大きく2タイプに分けるこ

とができますが、田辺家は、後者に該当します。次に、同タイプで現存する御神前ですが、簡屋の御神前(写真2)と、後に改修を受けて現在は主屋と一体化している毘沙門屋や竹谷の御神前があります(※3・4)。この3棟と田辺家の御神前は、主屋の裏手に御神前が位置し、入口を主屋側に向けている点で類似しています。また、文献上では、文政6年(1823)の紀行文『富士日記』に、「中門より広庭へ廻る。奥に一社を建て壇上に浅間の神を祭る」(※5)と記される小沢伯耆守の御神前との類似も指摘

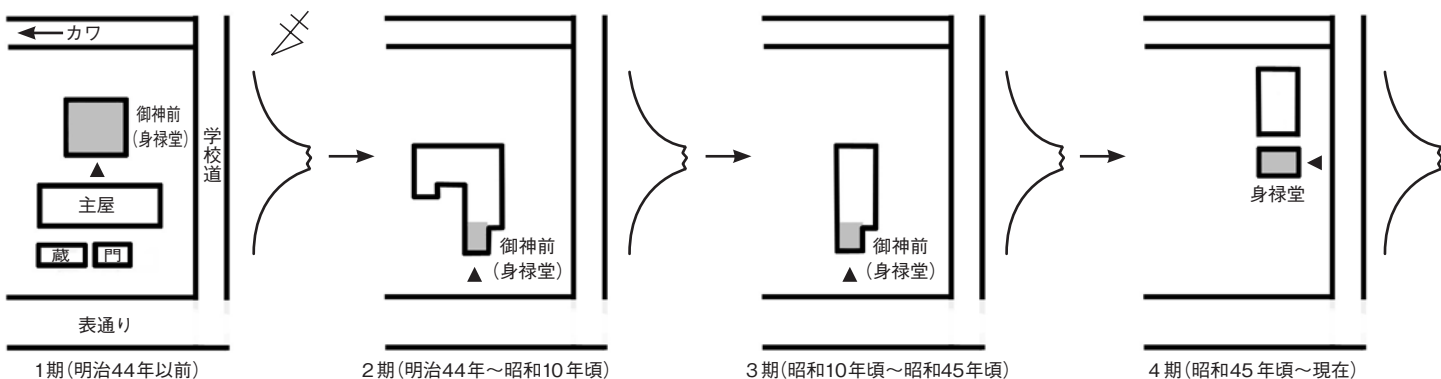
できます。

ただ、離座敷であった可能性も否定できないことや、明治44年(1911)4月5日の「中宿の大火」(※6)で田辺家は全焼しているため、残念ながらこの建物が御神前であると断定はできません。

次に、現在の身禄堂建立以後の変遷をみていきます。先ほどの大火当時の当主は、7代目の英一氏(※7)ですが、娘のHさん(大正15年生・女性)の話に基づいて、当時の様子を振り返りましょう。まず、物心ついた頃には、主屋の他に、身禄堂



■図2 身禄堂平面図



■図1 身禄堂変遷想定図

身禄堂の由来と変遷(中) - 田辺家の御神前から山元講の身禄堂へ -

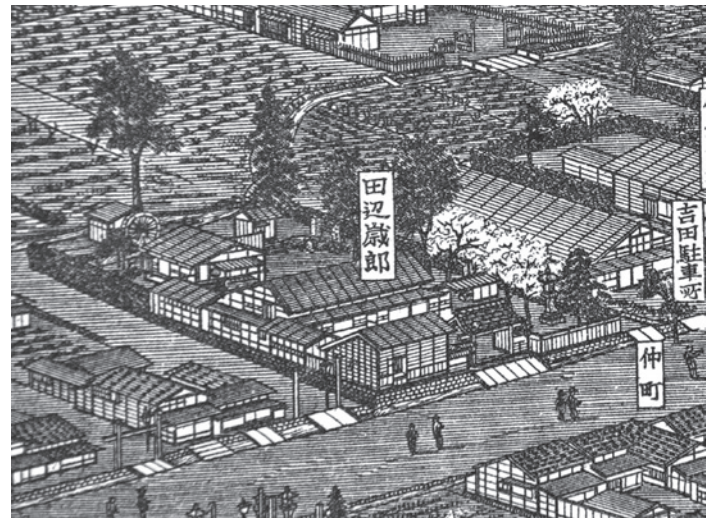
もあったとのことなので、少なくとも昭和初めまでには、主屋を再建し、現在の身禄堂も建立したようです(2期・図2)。

また、昭和10年ごろにも主屋を建替えています、身禄堂は改変されていません(3期)。

そして、身禄堂としての最も大きな変化は、表通り沿いから学校道沿いへの移転です(4期)。移転した年は、明確ではありませんが、昭和45年(1970)2月12日(※8)の学校道を挟んだ向かいの火事の際には、まだ移転していなかったとのご近所の話しや、昭和46年(1971)には移

転していたとのHさんの話しか、昭和45～46年に移転したと考えられます。更に、堂内にある「元祖食行身禄尊師神殿修築教典出版委員芳名」と題する1枚の奉納額に、山元講員と協力者名を併記し、末尾に「昭和45年10月25日」とあるので、この「神殿修築」が身禄堂の移転のことを意味すると考えれば、移転年を昭和45年に特定して良いかもしれません。

その後も、平成7年(1995)に大改修をするなど、大切に守られてきたこともあり、建物は現在も良好な状態でみることができます。



■図3 富士山北口本宮富士嶽神社境内全図(部分拡大)



■写真1 明治年間の田辺家



■写真2 簡屋の御神前

〈註〉

- ※1 表「奉誦請木花開耶姫命屋松大明神八百萬ノ神安鎮座 天保四年癸巳年正月ヨリ始五月建 前六月五日成就 田邊近江源道豊 西四十五歳 妻皆子四十二歳」・裏「天保四癸巳年六月五日土蔵入始 息災延命家産繁栄火災消除祈所 大工棟梁嘉兵衛 下郡内加畑 左官新右衛門」伊藤裕久・佐藤恵利子2002「山梨県の歴史的町並－堅家と横家－」『甲斐の美術・建造物・城郭』
- ※2 北川洋2010「富士吉田市上吉田地区御師住宅の建築に関する調査報告」『山梨県指定有形文化財 旧外川家住宅保存修理工事報告書』
- ※3 別棟の御神前は、主屋の手前にあるものと奥にあるものの、大きく2タイプに分けることができます。文中の御神前は、後者に該当します。前者の例には、御神前は既にもありますが、大國屋と幣司屋があります。

- ※5 芙蓉亭蟻蝶 文政6年『富士日記』(国立国会図書館山書を読む会1983『富士日記(抄)』)
- ※6 明治44年4月8日「吉田大火詳報」(山梨日日新聞)
- ※7 身禄堂資料の「行名免」に「御法会信心教導師 北行鏡月眞 七世田辺英行一我」とあります。
- ※8 食行身禄像の厨子内に、火災で焼失した軸物が納められており、その包紙に「昭和四十五年二月十二日夜二時 甲田久宅火災と共に焼失損傷する 二月廿六日 記」、包布に「奉納 梅谷秀治 昭和四十五年二月廿六日」とあります。軸物は、炭化して解読できませんが、御法会講の写真中では、祭壇に祀られていることから、御身拔など富士信仰に関係する軸物と考えられます。

富士山御師外川家に泊まった人々(前)

－『富士の道の記』の紹介－

菊池 邦彦(外川家調査員／東京都立航空工業高等専門学校教授)

御師外川家

江戸時代から続く富士山の御師「外川家」の屋敷が、富士吉田市歴史民俗博物館の附属施設として、上吉田下宿の地に新たに一般公開されたのは、2008年(平成20年)4月26日(土)でした。それから、早いもので3年がたとうとしています。熱心な多くの見学者の方々を見ると、その開設の式典に参加した者の一人として、実に有り難さが胸に迫ります。

現在、外川家の式台玄関を入ると、すぐ左に明和8年(1771)の「御師 外川兵庫」という扁額が掲げられ、ガラスケースには明和3年(1766)の「家作萬覚帳」や明治20年(1887)の家相図など関連史料が並べられています。その先には、道者*を一度に

百人以上も泊めたことがあるという離座敷が続いています(離座敷では足りない時は、前の座敷にも宿泊したようです)。たしかに外川家については、古文書

の分析や外川家の子孫の方々への聞き書によって、道者を迎える御師の側の様子は、ある程度復元することができました。[*富士山をはじめ霊山や寺社に参

詣する人々のことで、「導者」とも記される場合が多いのですが、本史料では終始「同者」と表記されています。この文では「道者」と表記しておきます。]



■式台玄関

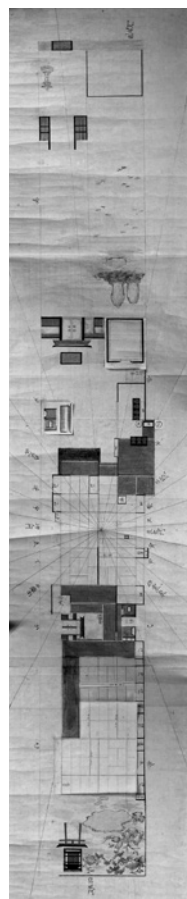
外川家を訪れた人々の記録

しかし、一方で、上吉田の御師を訪れる道者の側の史料の中に、外川家を訪れた記録がないか、この点については、外川家に関する総合調査報告書(『富士山吉田口御師の住まいと暮らし』2009年)をまとめるまでに見つけることができませんでした。ところが最近、全国の江戸時代の旅行記を研究なさっている板坂耀子先生(前福岡教育大学教

授)の書かれたものの中に、外川家に宿泊する記録が紹介されていることに気がつきました。早速、所蔵先の新潟大学附属図書館に伺い、ご許可をいただいて、めざす史料を拝見しました。昨年12月のことでした。史料の名は、『富士の道の記』という、少し厚めの冊子です。1ページに9行書かれたものを裏表で1丁と数えると、全部で86丁もあります。



■『富士の道の記』／新潟大学附属図書館



■家相図

作者

この本には、「東都深川隠商松露園礎山覚書」と記す後書があります。このため、著者は江戸深川あたりに住んだ文人と考えられますが、礎山という号のみで、残念ながら本名はわかりません。「我講の御師ハ仙元坊」と書いているので、上吉田の御師浅間坊の檀家であったことは確かで、「我講」とあるので富士講にも加

わっていたのでしょう。しかし、この時の富士山への登山は、講の一員としてではありませんでした。序文や後書によれば、十年ほど前に息子が大病にかかり、諸方の医師もさじを投げてしまった時、(作者はワラにもすがるつもりで)「富士の御山へねぎごと〔祢宜事〕し」、(もし治ったら息子が15の歳に〔御礼に〕)登山す

ることを誓ったのです〔「祢宜」というのは、通常は神社の神主・神官のことです。ネギゴトですから、神に祈るということで、この場合は富士山に願をかけたのです。原文には「三五歳」とありますので、 $3 \times 5 = 15$ 歳となります。15歳というのは、当時の社会で成年に迄育ったら、という意味でしょうか)。息子はその後無事成

長し、本来なら当人が御礼に登山するはずですが、勤めがあって出かけられないため、息子に替わって父親である作者が、天保14癸卯年(1843年)文月(陰暦7月)10日〔太陽暦に直すと、1843年8月5日にあたります〕に、富士山を目指して出発したのです。
※15歳は霊山に登山できる年令でもあります。

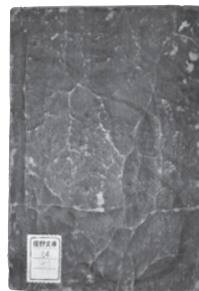
富士山御師外川家に泊まった人々(前) - 『富士の道の記』の紹介 -

旅の行程

旅は、彼の経済的余裕もあってか、かなりのんびりとしたものでした。この冊子の裏表紙には大きく墨で瓢箪が描かれていますが、これは作者が富士山に向けて出発して間もなく、豊島屋という酒屋で酒を2合買って瓢箪に詰めて携行したもので、この酒屋が勧め

る酒が「菊」という銘柄であったため、作者は「豊島の菊」と同行〔豊島屋の豊島=トシマと年増女をかけ、「菊」という愛妾と同行〕であると洒落たのです。このため、この瓢箪は作者の唯一の道連れであり、こだわりの品でした。作者は甲州道中を進み、10日に

駒木野〔八王子の次の宿です、本館刊行の『富士山みちしるべを歩く 改』をご覧ください〕、11日には猿橋〔現大月市〕に泊り、上吉田に着いたのは7月12日の午後のことでした〔太陽暦8月7日〕。



■『富士の道の記』裏表紙

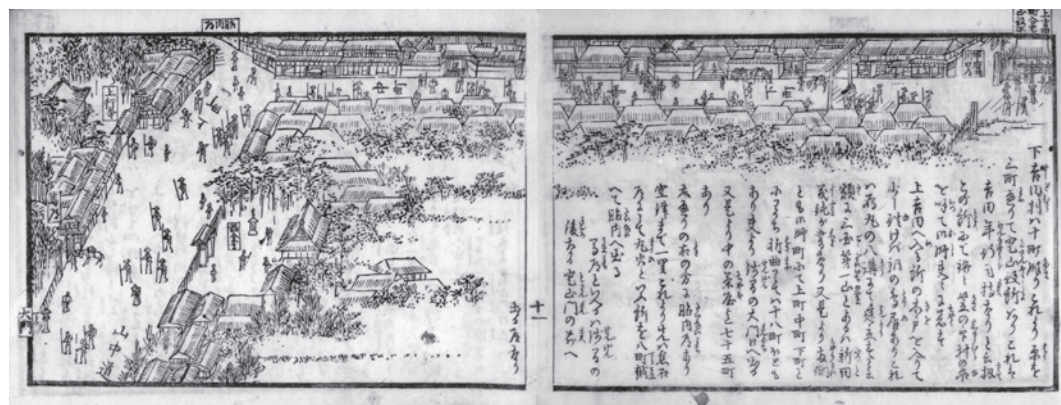
上吉田のマチの様子

この作品では、富士山北麓の登山口である上吉田のマチは、次のように描かれています(原文の訂正箇所は訂正後の文字を用い、理解を助けるために〔 〕の中に語句を補い、原文にない句読点を適宜付け、板坂先生に倣って会話の部分を「」で括りました。なお、原文には煩雑すぎるほどルビが付けられていますが、読解の便ともなっていますので、そのままにしておきます)。

【史料1】

田畑交じりの野中を行くと、下吉田の村に着きます。この村は、みな農民で、家も疎らに散在しています。〔私たちが歩いて行くと、〕村の子供達が集まってきた、「ビッキ撒け、へ」と、「つまり」「銭撒け」と、登り行く道者につきまとして来ます〔道者は、登山の道すがら、散銭を行うことが功德であるという習わしでした。子供達は、それをねらって、「ビッキ撒け、へ」と囃すわけです。そこで、次のように一首詠んでみました〕。

二階なき 吉田の里に
銭まけと 尾花がもとに
まねく子供ら
と詠みつゝ、左へよぎり、真っ直ぐに行きますと、上吉田の入口には改役所が有り、富士



■上吉田／『富士山道しるべ』

田畑交じりの野中を行、下吉田村、愛何れも農民にて、そここ、家もまばらに建、子どもも多くつどへ来て、「びつきまけ、く」、銭まけと、登り行同者につぎくるをミて、二階なき 吉田の里に 銭まけと 尾花がもとに まねく子供ら といへつゝ、左りへよぎり、直に行バ、吉田の入口に番家の有て、登り来る人々の国と郡と名所を帳にも付改る。木戸を通れば大鳥居、「富士山大権現」の額ハ新田源純公の御筆也。此鳥居の前にひざおりに、鈴ふりならし御歌を上る同者〔道者〕あり、又直さまに行モ有。是より御師・商家軒をならべて賑ハしく、登り来る同者アレバ、登山過て帰る同行ありて、其鈴の音かしましく、我講の御師ハ仙元坊なれど、一人り別ならん事の本意なくて、佐野の五人らが御師外川能登守へ行んと約しつゝ、東側に中程ほどの外川の家に、馬もろ共に七ツ下りに着にける。

■史料1

山へ登る道者の国・郡など出身地を、帳面にも付けずに改めています。

町の入口の木戸を通り大鳥居(金の鳥居)を仰ぐと、新田源氏

道純公の筆になる「富士山大権現」の額がかかっています。この鳥居の前に跪き鈴を振り鳴らして富士講の御歌をあげる道者もあれば、そのまま通り過ぎて

行く道者もいます。上吉田のマチは御師・商家が軒をならべる賑やかな所で、登る道者・帰る講中の鈴の音もかしましい所です。我講の本来の御師は(上吉田下宿西側の)仙元坊(浅間坊)ですが、これまでの道中で親しくなった(栃木県)佐野の五人組と分かれがたく、彼らが宿泊する御師外川能登守へ一緒に泊まることにし、七ツ下がり(夕方午後4時過ぎ頃)に(上吉田のマチの)東側中程の外川家へ、馬に乗って到着しました。

すなわち、作者本来の宿坊は浅間坊であったのですが、たまたま途中で知り合った下野(栃木県)佐野の五人組の富士講の人々と別れがたく、彼らの御師である上吉田下宿東側の外

川家（道を挟んで浅間坊の斜め右向い下宿の一番上、中宿との境）と一緒に泊まることにしたのです。もし、そうでなければ、貴重な外川家宿泊の様子を含む、この記録は生まれなかったのです。



■富士山北口本宮富士嶽神社境内全図（部分拡大）



■外川家住宅

外川家のもてなし

【史料2】

「吉田の御胎内へ行くにはもう時間が遅いので、足をすすいで（屋敷に上がって）下さい」と（外川家の人が）持出すたらいの水は冷たく（気持ちよく）、（それとは対照的に）出された熱いお茶で喉を潤します。早速、旅支度を取捨てて（家に上がると）、案内されるままに、上段の次の間へ通ることになります。

〔外川家の離座敷には、御神殿と身祿の木像が置かれていた12畳の「御神前の間」を中心に、その奥に「上段の間」と「下段の間」があります。上段の間は名前の通り他から一段高くなった8畳間で、床の間と書院がある立派な造りで

す。一方、上段の間の隣の下段の間は御神前の間などと同じ高さの8畳間です。この他、御神前の間の手前には、15畳の広間があります。作者の一行が通されたのは、「上段の次の間」なので、6名という一行の人数からも、8畳の下段の間ではないかと考えられます。なお、どこから離座敷に入って行ったのか書かれていませんが、聞き書などによると、通常の講社は式台玄関を通らずに、中庭から足を洗って直接離座敷に上がったといひます。この時も同様に縁側を通して直接次の間（外段の間）に入ったと思われます。〕

「お湯もわいていますから、勝手にお入り下さい」と案内

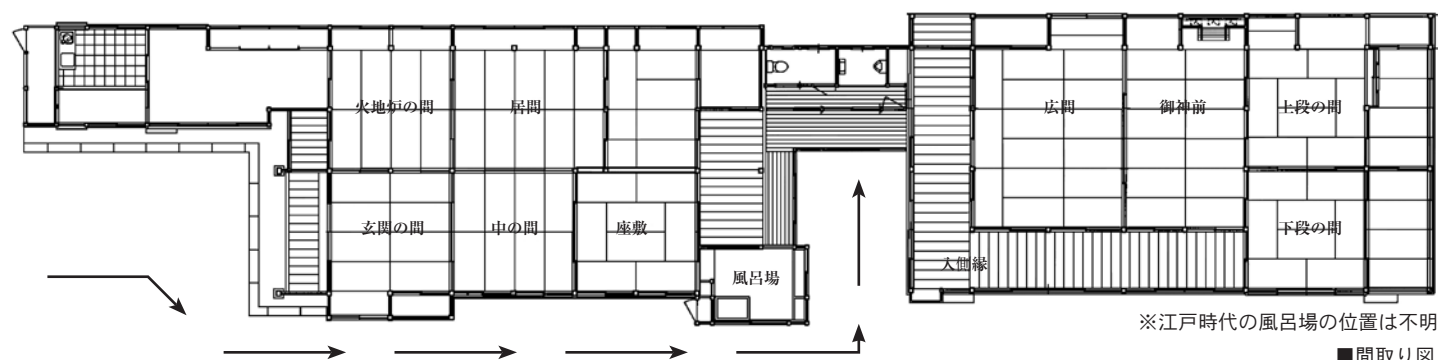
の者は言い捨て、立ち去りました。

「それじゃあ、お湯にでも入りましょう」と一人ずつ代わるがわるに入り終わると、

私たちより先に到着して御胎内へお参りに行っていた道者十四、五人の一行が、どやへと帰って来ました。彼らが預けていた笠の印は 兎（兎）で、



■下段の間



※江戸時代の風呂場の位置は不明

■間取り図

富士山御師外川家に泊まった人々(前) - 『富士の道の記』の紹介 -

「最早御胎内へハおそかるべし、足すゝぎ給へ」と持出すたらいの水のひや
と、あつき茶もるともくミ出せば、仕度取捨上段の次の間へ案内にまか
せ通りければ、
「はや湯も出来て有なれば勝手にめさせ候へ」と案内ハ言捨、立にける。
「さらバ湯入らん」と一人りづゝかわりゝに入仕舞バ、我らより先へ着
たる同者十四、五人、笠の印ハ愈つゝミモ笠も預け置、御胎内へ参りて、ど
やゝと帰る来る。是ハ上総乃木更津辺の者なるよし。
夫より御師のまかり出て、暑き冷き道中の安否、登山の奇特など礼をなし、
「何もなしとも神酒一ツ進らせん」と吸物三ツもの取まぜて広ぶたにのせ差出し、
「ゆるりし勝手にめさせよ」と立行跡にてはじめつゝ、さへつおさへつ、
或時ハぐるゝ廻し逆戻し、肴ハてんでに勝手箸、呑や喰やと友じいに、面
のあからむものもあり、痰にせかるゝ人もあり、ほくゝ居眠るもありて、
はや酒もたけなわになりけるころ、手代の来りて、
「よろしくめせ」と礼なしつ、「ちとおあい」など取手に、「もはや十分
おつもり」といふうちに安左(先の一行の指導者安左衛門)と我と礼しつゝ、
「あすハ御胎内より御山を掛越し、須走へ下りたし。御礼も今宵頂きて、
強力賃や山料まで御勘定頼たし。又御馬揃しまでハ馬かりて登りつらんと思
ひぬれば、是もやとへて給われよ」。其外くさゝの事ども埒明て、
「あすハ未明に立いでたし。何卒御世話頼ぞ」と得て勝手に頼をも、
「承知」と呑込手代へ盆納れば、続て持出す膳おしき、食事仕舞ハ強力
案内も共に二役の、
「明日の御供は私なり。何分御頼申ぞ」と引替、御師ハ御札を持出し、夫々
の札買終り、又しばしして、
「夫々の御勘定ハかくの通り」と手代の持出す書付ハ、
一百廿弐文 御山役料 一九十弐文 綿入損料 一百文 御持弁当
一八十文 上下ワらし四足 一八十文 強力わり合 〆壺人前四百九十文
といへる所へ、一人り毎に金弐朱つゝ出し、残りハ、余り少しなれども坊入
也と手代に渡せハ、御師の出で坊入の礼をのべ、
「はや寝まり候へ」と蚊屋つり寝ござとんまで持出す合図に、ほつゝ降
り来る小雨ハ、今日午の七刻土用の明し印にやあらん冷しさやと、不二の
御山を枕とし能夢ミんと、ミなもる共に寝まりけり。

■史料2

これは上総の木更津辺(千葉
県木更津市)の者のようです。
〔外川家の檀家は房総半島、特

に現在の千葉市から市原市、
木更津市域に及び、その講社
は愈の笠印であり、本書の記

述と一致しています。〕

ここで当家の主人の御師
(外河能登守)があらわれ、道
中や山の天候、登山の奇特、
(宿泊の)札などの口上を述
べ、「何もございませんが、お
神酒を一ツ召し上がってくだ
さい」と吸物・三ツもの〔口
取・刺身・焼肴の三品〕取ま
ぜて、広ぶた〔大形の盆〕にの
せて差出し、

「どうか、ごゆるりと、お勝
手にお召し上がり下さい」と
言い捨てて立去ったので、私
たちは早速酒宴をはじめまし
た。「さへつ、おさへつ」、或時
は徳利をぐるゝ(とお互い
に)廻したり、逆戻ししたり、

酒の肴はてんで勝手に箸をつ
けます。「呑や、喰や」と仲間
同士すすめあい、顔のあから
む者もあれば、痰にむせかえ
る人もあり、「ほくゝ」と〔満
足そうな様子でこっくりこっ
くり、といった状態でしょうか〕
居眠りを始める者もいます。
はや酒宴もたけなわになるこ
ろに、宿の手代が来て、

「よろしく、お召し上がりく
ださい。」と挨拶をしつゝ、「ち
とおあい」〔もう少しいかがで
すか〕など〔酒席の〕取り持ち
をします。「もはや十分おつも
り」〔おつもり〕というのは、
酒席でこれで終わりにすると
いう挨拶の言葉です〕と言う



■ヒロブタ

富士山御師外川家に泊まった人々(前) - 『富士の道の記』の紹介 -

うちに、安左〔先の五人の一行の指導者安左衛門〕と私は挨拶をしつつ、

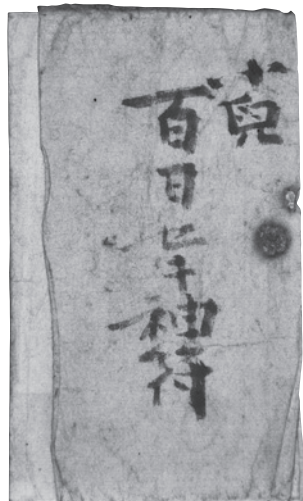
「明日は御胎内から御山を掛越して、須走〔静岡県駿東郡小山町須走〕へ下る積もりです。御札も今宵(今夜の内に)頂いて、強力賃や山料まで御勘定をお願いします。また、御馬返しまでは馬を借りて登ろうと思いますので、これも雇っていただきたい」。この他、いろいろの事を済ませて、

「明日は未明に出発したいので、何卒お世話をよろしく頼み致します」、と(こちらからの)得て勝手な頼みにしても、(手代はこともなげに)「承知いたしました」と受け答えをする。

手代が酒の器を下げると、続いて膳が並びます。

晩ご飯が仕舞になると、(実は、それまで片付けていた者が)強力案内も共に(行う)二役の(者であったことがわかりました)、「明日の御供は私でございます。何分よろし

くお頼み申します」と口上を述べます。すると、引替って御師が御札を持出しますので、私たちはそれぞれ望みの札を買いました〔外川家には、富士浅間大菩薩や虫封じ、養蚕繁盛などの様々なお札の雛形が小箱に残っています。特に外川家は、百日咳の封じが得意でした〕。



■百日咳の御札

それが終わると、またしばしして、「それぞれのお勘定は

この通りです」と、手代が〔勘定書の〕書付を持出します。それを見ると、

一百二十二文 御山役料
一九十二文 綿入損料
一百文 御持弁当
一八十文 上下草鞋四足
一八十文 強力わり合

メ壺人前四百九十文〔96銭の計算では482文〕

となっていましたので、一人毎に金貳朱(1両の1/8)ずつ出し、残りは余りにも少しだけけれど「坊入」です、と手代に渡しました。すると、御師が出てきて、坊入の札を述べます〔坊入りとは、「邸入り」などとも書かれ、道者が御師の屋敷に泊まる際の宿泊代の様なものでしょう。天保年間頃の相場が1両=(6500~)7000文くらいとすると、2朱は875文、これから490文を引くと、坊入りは395文、約400文程になります。この勘定書には、宿泊料・食事代・酒代などの項目がありませんので、坊入りはこの部分に相当したのでは

う。なお、外川家は市原市五井の酒造家齊賀家と姻戚関係にあり、ヒジロのある部屋に薦被りの四斗樽を置いて飲み放題にしていた時期もあったといえます。太っ腹ですね。坊入りには、このように近代的な宿泊業以前の、宗教的な「志納」の面が残されていたと思われます〕。

「はや、おやすみ下さい」と蚊屋をつり、〔外川家の手代が〕寝蓐藁ふとんまで持出すのを合図に、ポツ／＼と小雨が降りはじめました。今日午の七刻に、土用が明ける印でしようか、(空気は一層)涼しくなり、富士の御山を枕として、「能き夢をみましょう」と、皆もろ共に(横になって)寝静まりました。

このように、外川家に宿泊した7月12日の夜は、静かに更けて行きました。

富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間／午前9:30～午後5:00(午後4:30迄入館可)

休館日／火曜日(祝日を除く)、

祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始

観覧料／大 人 300円(団体 240円)

小中高生 150円(団体 120円)

交通案内／●中央自動車道河口湖ICより車で10分

●東富士五湖道路山中湖ICより車で10分

●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



博物館附属施設

御師 旧外川家住宅のご案内

〒403-0005

山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8

TEL 0555-22-1101

観覧料／大 人 100円(団体 80円)

小中高生 50円(団体 40円)

※博物館・富士山レーダードーム館の

チケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとわれています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665

博物館ホームページ URL ● <http://www.fy-museum.jp> E-mail ● hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp

2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

発行/平成23年3月31日 印刷/K2・ONE